【歴史・民俗】

【講演】江戸時代の大坂の位置づけをめぐって
――幸田成友・宮本又次と『浪速叢書』――

兵庫県立歴史博物館 館長　藪田　貫

はじめに

日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部の研究集会で講演する機会を与えていただき、ありがとうございます。

知多半島総合研究所、われわれには「知多研」という略称の方が馴染みがありますが、「知多研」といえば、3年前（2013年7月11日）に急逝された青木美智男さんを想起せざるを得ません。歴史研究者の兄貴分としていろいろと教えられた人ですが、日本福祉大学在籍中のことでいえば、「知多研」で進められた福井県の河野浦・右近家の総合調査が強く印象に残っています。1993年8月28日付の「福井総合新聞」の切り抜きが手元にありますが、9月2日に現地調査が実施されることを伝えた上で、調査団長であった青木さんの「同じ性格の尾州廻船との比較研究のほか、両廻船を調べることで日本海と太平洋側まで広範囲の海運・物流を研究できる貴重な機会」とのコメントが掲載されています。青木さんばかりか、永原慶二氏も参加され、ふたりとも鬼籍に入られたいま、とても懐かしく思い出されます。「知多研」が、廻船・物流研究のメッカと目されるにいたる一里塚であったと思います。

さて本日は、そんな懐かしく、かつ学恩を蒙ってきた「知多研」歴史・民俗部の研究集会に招かれたのですが、今年の集会には「近世物流における伊勢湾と大坂湾」というタイトルが付けられています。まことに「知多研」らしい問題の設定ですが、わたし自身に物流史に関する蓄積も新知見もありません。むしろ、後で述べますように個人的には、それとは遠く離れた大坂の武士に関する研究に専念してきたのが実際のところです。ただし研究チームとしては、2004年から2015年まで10年間にわたって、大阪の文化遺産研究―大阪文化遺産学研究センターと大阪都市遺産研究センター―を組織してきた関係から、折に触れ、海運史・物流史に触れる機会がありました。とくに今年（2015年）の前半に、日本海側のある家で、近世後期の大坂、「天下の台所」を描いた「浪花名所図屏風」の発見に立ち会う機会がありましたので、講演の最後にそれを紹介することで、「近世物流における伊勢湾と大坂湾」という課題への責めを果たしたいと思います。

「知多研」もそうですが、研究者が個人的にするのでなく、集団として特定の研究に従事していると、研究者としての発想に変化が生まれるように思います。わたしの場合それは、「研究史という考え方」から「受け継いだもの」「遺産という考え方」への推移だととらえています。俗にいうなら研究史は「乗り越える」ことが求められるが、遺産は「受け継がれる」ことに重きが置かれることとなります。「乗り越える」ことばかり意識してきた身には、「受け継いだもの」という発想は、きわめて有効で

あったと思います。本日の講演の趣旨はそんなところにある、と理解して聞いていただけると幸いです。

1．近世大坂を見る視点

江戸時代の大坂[1]という点ではわたしの場合、ここ15年間、「武士の町」大坂という問い（仮説）を立てて研究してきました。小著『「武士の町」大坂～「天下の台所」の侍たち』（中公新書、2010年）は、そのひとつの成果ですが、問題関心の所在は、次のとおりです。

（1）徳川幕府が天下普請として大名を動員して建造した大坂城があるのに、武士のことを研究しないで、町人ばかり研究するのはおかしくないか？

（2）「天下の台所」あるいは「町人の都」などと大坂の代名詞を決まり文句のように使うが、それは誰が、いつ、どういう意味で言い出したものか？

（3）武士がいたとして、その人数はどれほどで、政事と文事の関係、町人との関係はどうか？

この発想には研究史が強く意識されており、研究史に新生面を拓こうという野心もみえます。当時、そう考えていたと思います。と同時に、先駆者がいて、その人たちの研究を受け継いでいると、研究・調査を進めるなかで自覚するようになりました。特筆すべきは、在坂武士の人事録である『大坂武鑑』と『浪華御役録』が、大阪府立中之島図書館や大阪城天守閣、大阪市史編纂所、大阪市立博物館（現在、大阪歴史博物館）などに多数収蔵されていることです。そのことはすなわち、江戸時代の大坂に武士がいたことは自明なことで、それらの武士の紳士録を利用する人が少なくなかったことを意味します。このうち『浪華御役録』については、幸田成友の先駆的な大塩研究（後述）が基礎を築いたとみるのは異論のないところだろうと思います。1837年（天保 8 年）の大塩の乱に、江戸・東京人であった幸田が、強い関心を示したことに源を発しているのです。

しかし、そんな史料的な蓄積がありながら、在坂武士への関心は高まりませんでした。声高に「武士の町」大坂とわたしが唱えようと判断したのは、そんな状況を変えたいと思ったからです。同時に、幸田の「大塩研究」が、『浪華御役録』という史料の所在と重要性を教えたとするなら、わたしも「武士の町」大坂という以上、何がしかの史料の所在と重要性を語るべきであると考え、着手したのは、大坂町奉行や代官の日記の収集でした。現在まで、わたしの責任で公刊した日記は次のとおりです。

・新見正路（大坂西町奉行／文政12年〈1829年〉～天保 2 年〈1831年〉）
　東北大学附属図書館所蔵『大坂西町奉行新見正路日記』（清文堂出版、2010年）。
　　⇒公務と私用を分ける／異なる登場人物／政事と文事

・竹垣直道（大坂谷町代官／天保11年〈1840年〉 9 月～嘉永 2 年〈1849年〉 2 月）
　東京大学史料編纂所所蔵『大坂代官竹垣直道日記』（関西大学なにわ・大阪研究センター、2007～10年）。
　　⇒代官所のなかに堤方と廻船改方
　　⇒河川管理と廻船管理

・久須美祐明（大坂西町奉行/天保14年〈1843年〉5月～弘化元年〈1844年〉9月）
筑波大学附属図書館所蔵『大坂西町奉行久須美祐明日記』(清文堂出版、2016年)。
⇒73歳の高齢奉行、日記と同時に書簡集も現存

これに関して大阪には、受け継ぐべき遺産はありませんでした。「大阪には」としたのは、東京にはあったからです。なぜなら、「新見日記」と「竹垣日記」の所在をわたしは、東京大学教授（当時）藤田覚氏による文政期から天保期にかけての中央政治史研究によって知ったからです[2]。中央政治史研究なので、あくまで「中央」から地方を見るという視点で、それらの史料は使われているのですが、わたしはそれを、大坂という「地方」の史料として読もうと決めました。地方都市大坂の武士を語る上で良質の史料だろうと予想したからです。それが大正解であったことは、上記の史料集と同時に、小著『「武士の町」大坂』を読んでもらえば了解されると思います。

このふたつの日記の公刊は、不思議な体験であったといえます。江戸・東京人の目から見れば、近世の大坂に武士がいたことは自明のことなのに、大坂では、その事実と意味を長い間、問おうとしなかったのではないか、という問いが膨らんできたからです。大塩に注目したのも江戸・東京人の幸田であり、大坂代官と大坂町奉行の日記を使って中央政治史を描いたのも東京大学教授の藤田覚氏であるのは、偶然の一致とはいえないでしょう。江戸からは見える武士が、大坂では見えない―という不思議な関係が、成立していたというほかないでしょう。

幸いなことに近年では、大坂ばかりか畿内･近国の範囲で武士の存在を問う研究が、若い人たちによって発信されているばかりか、幕末の大坂湾海防問題を取り上げて、大坂城の軍事的な位置を測ろうという研究も進められています[3]。江戸・東京が持ち続けてきた武士への関心＝視点を受け継ぐことで、近世大坂の研究に新しい潮流が広がっています。

2.「天下の台所」と大坂（その1）

先にあげた日記のうち、「久須美祐明日記」には異なった経緯があります。それは、大阪の研究遺産として受け継いだという一面があるからです。

近代に入って実証的な歴史学は、帝国大学文科大学卒業の日本人研究者によって進められたのですが、そのひとりである幸田成友（江戸生、1873–1954）は、その若き手腕を「大阪市史」編纂という大事業に発揮しました。その作業途中、本編の『大阪市史』完成以前に『大塩平八郎』（東亜堂書店、1910年）を書き上げたのですが、弱冠37歳のことです。近代日本の新興歴史学の勢いをみる思いがします。

後年幸田は、その頃を回顧して、次のように記しています（下線は藪田）。

①私が市史編纂の任に当たりまして一番初めに当惑いたしましたのは、<u>大阪に関係する材料が極めて少ない</u>事であります。（戊辰戦争による持ち逃げ、火災、売却など）併し私が大阪へ参りましてから、公私の助力により若干の史

料を集めまして、夫によつて大阪編年史料を作り、事実を正し、次に之を土台にして市史の編纂を致して居りますが、いかに大阪だけを調べても事実の真相が解らぬといふことを、言ひ換へれば他所との関係他所との比較研究の必要を、この頃に至つて感じるのであります。(「徳川時代の大阪市制」『日本経済史研究』(大岡山書店、1928年)、のち『幸田成友著作集第 1 巻』近世経済史篇 1 (中央公論社、1972年)所収)

作業途中ならではの期待感が込められており、格闘する幸田の姿が偲ばれますが、作業を通じて浮上してきたのが「天下の台所」大坂です。それは早速、処女作『大塩平八郎』に取り込まれ、「天下の台所」と大塩の奇妙な結合がみられます。

②大阪と申しますれば昨晩も申し上げた通り、「町人の都」といふことを誰もが申すことであります。大阪は「天下の台所」日本全体の台所であつて、日本で消費するところのものを大阪が一手で引き受けて居るといふ言葉を、徳川時代にはよく申していたので御座います。(「日本経済史上の大阪」(大大阪記念講演会の収録『大阪文化史』大阪毎日新聞社、1925年)
大阪は天下の台所である。しかり台所であって書院または広間ではないが、台所の一小事は一家の煩いとなり、大阪に生じた異変は海内に波及する(『大塩平八郎』)

ここで注目したいのは、「天下の台所」大坂を幸田は、「徳川時代にはよく申していた」として、特段、史料をあげていないことです。明治初年に生まれ、明治30年代の大阪に来た幸田にとってそれは、言説で十分であっただろうと思われます。

しかし史料に拘るなら、それはどこに書いてあるかと問題にしてもいいでしょう。果たしてその史料は、1899年(明治32年)に開始された「大阪商業史資料」の編纂のなかで発見され、「大阪の沿革」として収められました。それは、久須美祐雋(蘭林、1796年〈寛政 8 年〉～1863年〈文久 3 年〉)の随想「難波の風」で、そのなかには「天下の台所」が明記されています。

浪花之地は、日本国中船路之枢要にして、財物輻輳の地也。故に世俗の諺にも大坂ハ日本国中の賄所とも云。又は台所也ともいへり。実に其地巨商富沽軒を並べ、諸国の商船常に碇泊し、両川口よりして市中縦横に通船の川路ありて、米穀を始め日用の品はいふに及ばず、異国舶来の品に至る迄、直ちに寄場と通商ある故、何一ツ欠るものなし。
古来よりかくの如き土地がら故、商沽専らにして人気もおのづから其気に移り、利を謀ること他国に超て叡敏なり。故に純朴質素の風は更に失ふて、只々利益に走るの風俗のミ。士といへども、土着のものは自然此風に浸潤して廉恥の心薄く質朴の風なし。これ浪花の風俗の大概なり。

この随想、大阪では「大阪商業史資料」に収められますが、のちに東京では『近古文芸温知叢書』第 7 編(博文堂、1891年)と『日本随筆大成』第 3 期第 3 巻(日本

随筆大成刊行会、1929年）に収められ、江戸期の大坂を語る第一級の随想として広く知られるようになったのです。東京と大阪で、ほぼ同時に注目された在坂武士の史料として記憶しておく必要があるでしょう。

ところが実証史学者としての幸田は、町奉行の随筆よりも町奉行の生の史料に拘っていました[4]。

③「天保14年 9 月、西町奉行久須美佐渡守祐明から、幕府に差し出した内密書類の中にも、彦次郎には先年祐明江戸在勤中面会し、御用談も致し、御用に立つべき者と見込みしが（略）この度の御用金につきても同人骨折にて、人気も立ち直り、御用も相整ひ申したと褒めて居る」（「御買米及び御用金」『史学雑誌』26−9、1915年）

④「大坂町奉行久須美祐明から内密に幕府へ差し出した同年八月の書状を見ると（略）兎に角外記は一太郎を伴れて八月十二日に但馬へ出立し、同月晦日に帰つてきた」（同前）

これらの史料は、「その後更に天保十四年の御用金に関する新史料を見出し得た」（「天保十四年の御用金」『商学研究』5−2、1925年）と書くように、50歳代となった幸田が、あらためて江戸時代の大坂に向き合い、史料調査した結果でした。そこで彼があげる史料は、「天保撰要類集、市中取締類集（江戸町奉行所編、帝国図書館保管）、大坂表御用金並上金増金等大辻書」などで、大半は今日、国立国会図書館所蔵「旧幕府引継書」として知られているものです。

最後の「大坂表御用金並上金増金等大辻書」に注釈して幸田は、「（一色山城守直温の旧蔵資料、佐渡守は一色の同僚祐雋、祐明はその先代と考へます）」と書いており、幕末期の大坂町奉行一色山城守直温の旧蔵資料は、この時すでに商科大学教授幸田の手元にあったと思われます。したがって一色が出るのは当然として、「佐渡守は一色の同僚祐雋、祐明はその先代と考へます」という一文には説明が要るでしょう。なぜなら、祐雋が随筆「難波の風」の筆者であることを知っている幸田は、その名前から類推して、1843年（天保14年）の御用金記事に出る久須美佐渡守祐明を「その先代と考えます」と判断しているからです。当時、幸田には久須美祐明なる大坂町奉行の正体が掴めていなかったのです。

随想「難波の風」は、じつは「在阪漫録」の一部であるとして大阪府立中之島図書館に勤務していた多治比郁夫氏は、それを元の形にして『随筆百花苑』14（中央公論社、1981年）に収めましたが、明治維新後、久須美家から出た「在坂漫録」は浅草広小路の書店に流れ、さらに小宮山綏介の手で『近古文芸温知叢書』に一部収められた後、帝国図書館（現国立国会図書館）へとわたり、今日に至っているのです。

「在阪漫録」を『随筆百花苑』に収めた多治比氏は、その解説のなかで、久須美には在坂中に江戸の留守宅に送った書簡集「浪華の雁」というものがあり、両者は深くかかわるだろうと指摘しているのですが、それは現在、筑波大学附属図書館に所蔵されています。筑波大学はもとをたどれば東京教育大学、さらに東京文理大学、東京高等師範学校に至りますが、1896年（明治29年）に東京高等師範を卒業し、台湾で旧制中学校の教師をした元田脩三という人物が、昭和初期の『茗渓会雑誌』に「久

須美文書解題」、前後して雑誌『歴史地理』49巻3号、5号、6号と50巻1号（1927年）に「久須美蘭林父子及びその一門」を連載しているのです。幸田の視野の外で、「その先代と考えます」と幸田がいう久須美祐明の正体が解明されていたのです。しかも元田は、「蘭林の名が「難波の風」によってのみ記憶されるべきでない」と述べ、大坂町奉行の史料が随筆を優先し、実務記事ばかりの「久須美祐明日記」や書簡集「難波の雁」を軽視している傾向に警鐘を鳴らしています。

ここには「文事」を優先し「政事」を軽視する傾向、あるいは「政事」と「文事」の分離がみて取れます。このことは武士に注目することは、武士身分にある「政事」と「文事」に関心を注ぐことを意味します。ただし双方の世界には偏りがあるので、久須美祐雋蘭林のように「文事」で目立つ人がいるかと思えば、その父祐明のようにみずから告白するように文事に疎く、「政事」に邁進した人もいます。どちらが後世の読者の目を引くかとすれば、よほどの変革期でないかぎり、華やかな「文事」に軍配が上がります。大坂西町奉行であった新見正路（1791–1848）もそのひとりで、江戸時代の大坂への貴重な証言を残していたことが明らかにされていました[5]。

吾成童の昔、学に志てより聚書の癖有と雖も、力乏くして書籍を購る事意に任せず。（中略）天保改元の年、浪華市尹命じられ彼地に赴きしに、さすが畿甸の地、往古よりの名区にて、名にしおふ平安の京も遠からざれば、吾妻にも稀なる古版旧鈔の珍籍も多く現存して、往々見当りぬ。況其諸国船舶の輻輳する所にて崎陽の渡口なれば、漢籍を得るの便も亦宜し。ここに於て費を惜まず力を尽して是を購し、経史子集は更なり、国書草子の類までも吾少時に比すれば頗る蓄る所有と云うべし。然に三年を経ずして召還され、職遷り班進み、賜賚も亦若干なれば、益務て書を購し、架に挿み櫝に納と雖も、今は猶余あれば、几案の四隅文籍満て縦横堆くして、膝を容るの地もなき計也。（後略）（新見正路『賜蘆書院儲蔵志』序文）

「天下の台所」を擁する「町人の都」であった大坂が、同時に「文芸と出版の町」でもあったことを新見は発見しているのです。「文事」に造詣の深かった新見ならではの観察ですが、面白いことに、「新見正路日記」では、政事を公日記に記し、文事は私日記に記すという書き分けをしているのです。日記が公刊されることの意義は、このあたりにあるのではないでしょうか。

「文事」の祐雋でなく、「政事」の祐明に注目した元田は、みずから久須美祐明「浪華日記」の刊行を企図していたのですが、諸般の事情で果たせなかったようです。来年（2016年）、わたしの編で刊行予定の『大坂西町奉行久須美祐明日記』はその意味で、元田の遺志の継承ということができます。それは、江戸・東京に残された遺産を、「武士の町」大坂という仮説を立てることで、わたしが引き継いだことになるのでしょう。

3．「天下の台所」と大坂（その2）

ところで、わたしが引き継いだ研究遺産は、もちろん大阪にもありました。その筆頭は、言うまでもなく宮本又次（1907–91）の業績です。宮本が、郷里大阪の歴史

研究に注いだエネルギーがどれほど大きなものであったかは、『宮本又次著作集』全10巻（講談社、1977–78年）のほか、流布している多数の単行本にみることができます。

その厖大さは、逆にその業績の特徴をとらえる際の障害となるのですが、戦前から戦後にかけて経済史の大家であった宮本が、大阪の研究に専念した経緯について、息子である宮本又郎氏が語る次の一節は大きな手掛かりとなります。

> 学術的な意味で、彼が大阪研究を始めたのは、京大時代の恩師本庄栄治郎博士（1888年京都生–1973）が主宰して進めた『明治大正大阪市史』編纂事業に参画してからというが、大阪への関心はもっと深く、彼の生い立ちに根ざしていた（心斎橋生まれ、北堀江育ち）。このように又次の大阪への関心はもともと生まれ育った地への愛着によるところが大きいもので、風俗史、世相史、文化史に傾斜したものであったために、経済史という分野での学術的成果を求められた若い時代（『株仲間の研究』1938年）には、その関心をある程度封印せざるをえなかった。封印を解き、大阪の歴史研究に大きなエネルギーを注ぐようになったのは、昭和26年（1951）、阪大教授として大阪に帰ってきてからである。（『大阪商人』講談社、2010年、解説）

その語るところは、戦後、大阪大学教授として郷里大阪に戻ることで、宮本の大阪研究が本格化した、ということですが、問題は、その時、宮本がどういう視点＝関心をもって、大阪に向かったかです。又郎氏が語るように、生地大阪西区北堀江を含む船場へのノスタルジーは、その愛着が強い分、「風俗史、世相史、文化史に傾斜」し、専門であった経済史との温度差が広がらざるを得ません。とくに京都帝国大学経済学部教授本庄栄治郎の歴史経済学派として薫陶を受け、『株仲間の研究』（有斐閣、1938年）、『日本近世問屋制の研究』（刀江書院、1951年）、『小野組の研究』（新生社、1970年）などが生まれたわけですから、その研究を通じて「なにがしかの視点」が用意されるようになっただろうと思われます。残念ながら、その視点を特定することは、いまのわたしにはできません。

ただ宮本が、京都帝国大学を出たあと、彦根高等商業学校・九州帝国大学と転任し、敗戦後、大阪大学に移るというキャリアを通じて、宮本の周囲に研究グループが形成されていったことに注目したいと思います。その成果は、『九州経済史研究』（三和書房、1953年）を皮切りに、『九州文化史研究所紀要』3·4合併号（天草諸島の史的研究続編）（1954年）、『九州経済史論集』（福岡商工会議所、1954年）、『農村構造の史的分析』（日本評論新社、1955年）、『商業的農業の展開』（有斐閣、1955年）、『近畿農村の秩序と変貌』（有斐閣、1957年）、『藩社会の研究』（ミネルヴァ書房、1960年）と陸続と生み出され、戦後歴史学の一翼を担うようになったのです。つまり宮本個人としての業績ではなく、チームリーダーとしての宮本の名伯楽ぶりが、じつは宮本のもうひとつの業績であったといえるのです。

わたし自身は、これらの作品群のうち『近畿農村の秩序と変貌』の論考、その後、安岡重明が単著『日本封建経済政策史論』（大阪大学経済学部社会経済研究室、1959年）

で提唱した「畿内非領国」論に大きな影響を受けたのですが、こうした発想が育ち、専門的な研究書が次々と著されたことは特筆大書するべきことと考えます。こうした研究と議論を通じて、宮本個人に、大阪を見る視点が構築されていったとわたしは考えるのですが、その内容は一言でいうと、「大阪＝『天下の台所』の天下は、幕府や藩の領国ではなく、いわば封建支配の真空地帯的性格を有しており、そこではかなりの程度、市場の原理が機能していた」となります。これは宮本又郎氏による要約ですが、『藩社会の研究』の冒頭を飾る宮本の「藩社会の構造と変動」は大略、次のように記します。

> 日本近世の国制を天下と国家に分けると、国家は大名領国として存在し、日本全国をいう天下と二元的に対立している。国家は藩札に示されるように紙幣を出し、信用経済の段階に達しているが、天下は終始、硬貨主義であったように、自然的経済の支配する社会であった。天下の意思は、国家には間接的にしか及ばず、天下の意思が直接的に現れるのは天領のみで、関東や畿内の非領国地帯は天下のものとなっていた。そこでの幕府権力の規制は国家統制に比べると緩く、その結果、大阪は藩際的な結び目になっていた。天下のものであるがゆえに大阪は、インター藩的に結びつけられていた。そこに大阪の経済的地位の特徴があった。

「町人の都」大坂、「天下の台所」大坂を見事に説明してみせた論考として、いまも色あせていません。天下対国家、自然性対意思性という論理も魅力的です。さらに「インター藩的な結び」は、グループの作道洋太郎氏や森泰博氏によって進められた蔵屋敷研究によって実証され、その後、「封建支配の真空地帯」としての大坂の市場分析が宮本又郎『近世日本の市場経済』（有斐閣、1988年）によって果たされ、ひとつの完成形をみせるに至りました。江戸時代の大坂研究における大きな達成点であり、遺産だということができます。

ここまで追求してくると戦後、宮本の大坂研究の独自性は、九州諸藩を中心に研究するなかで得られた「大阪市場と諸藩との連携」という視点にある、ということができます。いいかえれば大坂は市場として、米や国産品を売り込む西日本の藩の側から、客体として整序されることとなるのです。したがって蔵屋敷は視野に入るが、大坂城は視野の外、「与力同心といつても極めて僅か」という一言で、武士の全体性が無視されるという大きな歪みを生じることとなります。わたしが、宮本とそのグループの研究に啓発を受けながらも、あえて「武士の町」大坂という問いを立てるようになったのは、そのことに気がついたためだと思います。

幸い近年、「封建支配の真空地帯」論については若い世代によって修正が図られつつあります[(6)]が、江戸・東京で築かれた遺産との違いに留意してほしいと思います。

ところで本論では、研究史と対比して遺産というとらえ方を提示していますが、本庄栄治郎―宮本又次―宮本グループ―宮本又郎―高槻泰郎という研究史の流れとは別のところで、もうひとつの大阪遺産が作られていたことに、次に触れたいと思います。

これ（本庄栄治郎『日本社会史』改造社、

1924年）に佐古さん（1898船場生−1989）がかみつきました。佐古さん（当時、京大国史三浦周行門下）は教え子の肥田昌三を誘って高商（一橋大学）の機関誌である『商業及び経済研究』に「日本社会史の著者にまづ聴聞申す一箇条」を発表し、「材料をたくさん集めてきて、只形よく並べただけで、材料のよしあし、料理の仕方が全然分かっていない」とその欠点をあげつらったのです。（略）こののち本庄は学界のドンとして君臨し、京阪の経済史学者は本庄の門下生のみで占められていきます。佐古さんは完全に無視され、昭和 2 年、高商の教師を辞職。京大にも残れませんでした。（略）大阪に関することは、佐古さんがどのように書いているか、どのように言っているかを、かならず確かめるようにしています。（肥田晧三『藝能懇話』20、2009年）

やや暴露的な証言ですが、本庄―宮本の活躍の後景に、どういう事態があったかが語られています。「完全に無視され」た佐古は、船越政一郎編『浪速叢書』（浪速叢書刊行会、1927−31年）の相談役として名を載せますが、研究者として知る人はほとんどいません。だが今日、大阪商業大学商業史博物館佐古慶三文庫として記憶されています。彼の収集した古文書群は、近世大坂研究の宝庫になっているのです。研究史でなく、研究遺産という目で見ることの重要性を示しているといっていいでしょう。

4．新発見「浪花名所図屏風」の紹介

最後に、大阪遺産としての画像資料について触れたいと思います。というのも 7 月 4－5 日に、ロンドン大学SOAS（アジア・アフリカ研究所）で開かれた下記のシンポジウムで、それについて報告する機会があったからです。

Shifting Perspectives on Media and Materials in Early Modern Japan, *Interdisciplinary Perspectives on Early Modern Japan ― History and Art History: Text and Image/*（交流する日本近世史-美術と歴史・絵画と史料）

古文書を含む文献を中心に歴史研究するわたしには珍しい機会でしたが、『大坂代官竹垣直道日記』を読むなかで、美術資料に関する意外で重要な発見があったことを紹介しました。それは『浪華勝概帖』と題する画帳に関するもので、近世後期の大坂を描いた美術品として、1983年に出た『近世大坂画壇』（大阪市立美術館）によって知られています。同書では「大坂画壇の絵師二八人に九五景九八枚を描かせて江戸土産にしたもの」と解説が付けられ、上田公長・西山完瑛・森一鳳といった主だった画家たちに触れていますが、不思議なことに1848年（嘉永元年）という年紀の付いた篠崎小竹の序文に全く触れていません。その理由は、「竹垣君莅任此地五六年属画師近郊山水之諸勝」とある「竹垣君」の正体が、わからなかったからだと思われます。したがって注文主が不明のまま、委嘱されて描いた絵師だけの説明に終始することになったのです。

ところが、わたしたちの「竹垣日記」の解読によって、その正体が判明したのですから、期せずして、美術史にとっても文献史がいかに大事であるかが証明されることとなりました(7)。その意味で、美術と歴史、

絵画と史料の交流は積極的に進められるべきであることは論を俟ちません。

さてそこで紹介したいのが、近年、わたしたちが実見し、紹介する機会を与えられた新出「大坂名所図屏風」六曲一双（個人蔵）です。

左隻　桜ノ宮、天満天神、天満青物市、浪花三橋、八軒家、川船、大坂城、桃山、高津宮、道頓堀、北御堂、御霊社、新町

右隻　生国玉社、四天王寺、住吉大社、住吉浜、天保山、四ツ橋、堂島米市場、雑魚場、川口、廻船

描かれた名所をピックアップすると上記の通りですが、その特徴は、次のようにまとめられると思います。

①大坂の名勝（名所）をキッチリ描くが、人物に目鼻なし

②景観年代は江戸後期か？　天保山の位置づけがキーポイント

③川舟・廻船の占めるスペースが異常に大きい、海事資料としての読解

④「天下の台所」大坂の図像化

⑤画家ならびに施主（依頼者）は誰か

よく知られているように都市図屏風といえば、「洛中洛外図屏風」が著名で、しかも100点以上の作品が残されていることから、比較研究もさかんです。それに比べると大坂を描いたものとしては、新出の「浪花名所図屏風」を含めてわずか11点という少なさです。古都京都に比べた大坂の新興都市としての位置を物語ります。

「名所図会」という絵入り版本のジャンルでも、まず京都が出て（『都名所図会』1780年〈安永 9 年〉）、ついで住吉（『住吉名勝図』1794年〈寛政 6 年〉）、大坂（『摂津名所図会』1796年〈寛政 8 年〉・1798年〈寛政10年〉）と続きます。1834年（天保 5 年）に『江戸名所図会』が出る江戸をひとまず置くとしても、京都の後塵を拝する大坂の位置がうかがえます。

ところが「洛中洛外図屏風」が、京の町を二分し、左隻に西山、右隻に東山を背景にした洛中の町並みを描くという構図をとるのを常態とするのに対し、大坂の場合、西から東を望む系統と北から望む系統が併存することに特徴があります。谷直樹氏は、こうした構図は、大坂城と城下町の変遷に関係があるとして、次のように説きます[8]。

豊臣時代には北の大坂城と南の四天王寺がランドマークとして屹立し、その間に市街地があるという（西から見た）構図がふさわしい。ところが江戸時代になり、淀川から大阪湾に至る臨海部の開発と徳川大坂城天守の焼失（1665年）とによって、都市軸は南北から東西に転換し、屏風の中心に淀川を置き、船場の市街を北から眺める構図が生まれます。その画期は17世紀末の景観年代とされる「浪花名所図屏風」です。

こうした都市軸の転換・併存という問題は、江戸期に発展する都市図にも見ることができ、近刊の大作『近世刊行大坂図集成』（創元社、2015年）を開くと、その全貌が明らかとなります。こうした版行都市図の展開が生み出した屏風、それが新出の「浪花名所図屏風」ではないか、というのがわたしの私見です[9]。

西から眺望するこの屏風は、大坂城と四天王寺、そして住吉大社という三大名所とランドマークを視野に収めるのですが、北と南に離れた三者を六曲一双の屏風に収めるとすれば視点は西に、大阪湾上に据えるほかありません。屏風には例のないこの構図ですが、都市図には前例があります。「大

湊一覧」がそれで、「大坂市中と連なる海岸辺を近景に、遠景を生駒の山並み」とする縦60センチメートル、横100センチメートルの長方形の絵図です。幸いにも1834年（天保５年）の年紀をもつ「題浪華新丘図幷引」という付箋があり、それによると「遠客の需」に応じて手描きしたが、その「遠客」に木版画として出版することを求められたので出したとあります。

「大湊一覧」には、安治川・木津川と堺湊に一列となって入津する廻船を描いていますが、「浪花名所図屏風」には、屏風の前面に廻船・川船が所狭しと描かれ、その迫力は半端ではありません[10]。「大湊一覧」を注文した「遠客」と同様に、「浪花名所図屏風」を注文した依頼主も、「天下の台所」大坂の視覚化を求めていたと思われますが、それはどこの人でしたでしょうか。

一幅の名所図絵ともいえる『浪華勝概帖』の注文主が、江戸からやってきた大坂代官という地味な存在であったことは、「浪花名所図屏風」の注文主も、大坂以外の「遠客」であることを予想させます。いつの日か、それを確定する史料が出て来るのかわかりませんが、美術と歴史、文献と絵画と地図の相互交流が必要であることは、これからも変わらないと思います。

おわりに

知多半島総合研究所は、近世の物流史研究のセンターの役割を果たしておられますが、その守備範囲のなかに大坂もすっぽりと収まります。したがって研究所の成果は、わたしたち大阪を研究する者にとって大きな恩恵となっています。その一方、大坂はまた、江戸幕府の西国支配という守備範囲のなかに収まっていますので、その視点からみることも重要です。この度、わたしを招いていただいたのは、そのことを考慮されてのことではないかと思います。したがって、「武士の町」という問い＝仮説に導かれて学ぶ過程のなかで考えてきたことを中心に述べました。やや個人的な研究遍歴に終始した感がありますが、要約すると

（１）近世の大坂に注がれた視点＝史（資）料を大阪遺産として捉える
（２）視点＝史（資）料の偏在を認め、それを修正する視点＝史（資）料を追加する
（３）一つの視点＝史（資）料から結論づけないで、複数の資料＝外からの視点を生かす

ということになるかと思います。

拙い発表が、これからの知多半島総合研究所の調査・研究活動に資することがあれば幸いです。

注一覧

（１）通例に倣い明治までの大阪を「大坂」、それ以降を「大阪」と表示する。
（２）藤田覚『幕藩制国家の政治史的研究』（校倉書房、1987年）。
（３）岩城卓二『近世畿内・近国支配の構造』（柏書房、2006年）、小倉宗『江戸幕府上方支配機構の研究』（塙書房、2011年）、菅良樹『近世京都・大坂の幕府支配機構』（清文堂、2014年）。
（４）『幸田成友著作集』第1巻近世経済史編（中央公論社、1972年）による。
（５）森銑三「新見伊賀守正路」『森銑三著作集』続編第1巻（中央公論社、1992年）。
（６）高槻泰郎『近世米市場の形成と展開』（名古屋大学出版会、2012年）。

（7）大阪歴史博物館館蔵資料集8『浪華勝概帖』（2014年）。
（8）谷直樹「『浪花名所図屏風』発見の意味」『新出「浪花名所図屏風」』（関西大学なにわ･大阪研究センター、2016年）。
（9）藪田「『浪花名所図屏風』と『大坂図』」同上。
（10）森本幾子「『浪花名所図屏風』に描かれた船について」同上。

付記

本稿は2015年度日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部研究集会での講演をもとに加筆・修正したものである。